

2006（平成18）年度 前期 京都大学 入試問題 文理共通 第1問 解答例

問一

自然科学者にとって、数学的言語に基づく因果的で厳密な自然科学の思考と比べると、自然科学以外の分野である人文諸学の思考は、自然言語に依拠する曖昧なものであり、無意味な虚構以上のものではないという非難の意味。

* 「お話」という比喩表現を文脈に即して置換しつつ、その文脈自体を説明する。

問二

人間の意識や思考が物質世界に対してどのような関係にあるのか明らかではなかった時代には、物質世界の厳密な因果的進行と切り離して曖昧なままにしておけたことで、人間の思考の一切が自然法則から自由でありえたから。

* 「すべて」とは思考の無限定さの意であるから、本文で言う「自由」を指す。

問三

物質の数学的に厳密な因果的進行から隔離されていた人間の思考が、その数理的基礎の解明が進み、脳科学や認知科学が発展してきたことで、脳内過程の厳密な進行に支えられたものと考えられるようになっていったという意味。

* 「思考の自然化」＝「XからYへの変化」である。「自然化」の理由まで説明する。

問四

人間の思考の曖昧さは、曖昧なものが一つもない脳内過程の厳密な因果的進行に支えられているにもかかわらず曖昧たりうるという、奇跡的な矛盾を可能にしているから。

* 「驚異」である「理由」＝現実に起こっている事態が「奇跡」であることを説明する。

問五

自然言語における人間の思考は、精密な自然法則に伴う脳内プロセスによって生み出されながら、確かに曖昧さが存在し、思考の手段である自然言語の表現世界が内包する自由という豊饒な可能性を表しているという意味。

* 「芸術」とは、自由で豊かな表現としてあるものである。

Copyright 2019・現代文 まなびの礎 All Rights Reserved. 作成者 中野芳樹